

# 青年期における自己認知の発達 ——自己中心性との関連性

森 岡 正 芳

Adolescent Egocentrism and the Development of Self Image

MORIOKA Masayoshi

## 目 次

- 序
- I. 従来自己像の発達の研究とその問題点
  - 1 青年期における自己像の発達の特徴
  - 2 自己像の形成過程に関する操作的研究
- II. 自己認知の発達と自己中心性との関連
  - 1 自己像形成に関する認知発達の側面
  - 2 自己中心性の概念
    - 1) 児童期までの自己中心性の特徴
    - 2) 青年期における自己中心性
  - 3 自己認知及び他者認知の発達分化過程
    - 1) 認知機能の発達分化
    - 2) 対人的能力の発達と自己認知
- III. 自我同一性と自己中心性の関連
- 結 び に
- 引用文献

### (序)

自己中心性 (Egocentrism) の概念は、ピアジェによって主に、思考活動の自己中心性として、幼児期の知的発達過程を理解する主要概念として扱われてきた。自己中心性とは広い意味で、主体と客体が未分化な状態であることを意味する。この観点からすれば、精神発達の方向は、自分と他人のみかたを認知的に分化する能力を増大することである。

筆者は先に、青年期の自我発達理論を展望するなかで、認知発達の側面として、自己中心性の解決及び、道徳判断の発達をとりあげた(森岡1979)。そこでは、自我発達の各次元のうち、認知発達の流れに対応して、各発達段階における、自己中心性の特徴が明らかにされた。ここでは、認知様式の分化と自己像形成との関連から、青年期の自己中心性の問題をとりあげたい。というのは、児童期までと同様、青年期理解のためにもこの概念は欠かせないと考えられるからである。とくに、青年期の自己像形成について、その自己像内容諸次元がいかに形成されていくか、をみていくことが必要であるが、従来の研究では、自己像内容の認知的側面に焦点をあてたものは少

ない。自己認知と他者認知の発達の並行性について、Mullener 他 (1971) や Montemayor 他 (1977) が指摘しているが、それは対人知覚 (Person Perception) の発達と、自己評価に用いる人格特徴の分化との関連を指摘するにとどまっている。また、Exner (1973) は、自己中心性と社会中心性 (Sociocentrism) のバランスについて、SCT を用いて測定しているが、自己概念との関連については、それを示唆するにとどまっている。

そこでこの論文では、青年期における自己中心性の特徴を明らかにし、認知様式の発達という側面から、自己像、自己概念の形成及び障害について、新たな枠組を提出しようと試みる。

## I. 従来の自己像の発達の研究とその問題点

### 1. 青年期における自己像の発達の特徴

精神発達の過程の中で、自己像が特徴的な課題となるのは、一つには、幼児期における自己像の出現であり、他方は、青年期における自己像の再発見である。

幼児期の自己像形成に関して、多くの研究者は、身体像 (Body Image) との関連の中でとらえている。「自己」はまず、身体とそれ以外の視覚的環境との区別からはじまるわけで、自分にかかわりあうものは身体を中心に体制化され、さらに、外的な環境がたえまなく変化するにつれ、恒常的な「自己」がきわだってくる。したがって、自己像とは第一に身体像であるといえる。しかしながら、自己像の形成には、他者から与えられた評価にもとづいて形成される側面など、様々な要因があり、各々の自己像の側面を調整して、ひとつのまとまりとして維持していかねばならない。この過程がいかにしておこなわれるかということが、自己像形成に関する一つの大きな問題点である。

一方、青年期においてはどうかだろう。青年期は「自己を問いなおす時期」「自己にめざめる時期」として、よくその心理的特徴がいわれる。すなわち、「自分が自分であること」そのものが問題とされる時期である。青年期の発達の特質が何であるかといえば、まず第一に、「自己意識の転換期、再構成期である」ということが強調される。

青年期というまでもなく発達段階の中の一つの時期である。しかし、いつからいつまでを青年期ととらえるか、については社会文化的条件によって伸縮するものであり、今日、それが延長の方向にあることは、共通の理解となっている。つまり、10歳前後から30歳前後に至る20年間ぐらいを青年期とらえるべきだ、という提言がなされている。このような広範な年齢範囲の中で自己認知の形成過程をとらえたとしたら、論点が拡散してしまう危険性が大きい。この点でも、後述するように認知発達の諸段階、すなわち、思考の具体的操作から形成的操作に移行する過程に並行して、自己中心性の特徴をみると、青年期の自己像形成の発達の位置づけが、かなり明瞭になると思われる。

筆者は先に、青年期における自己像と Identity の形成との関連をとらえるにあたり、二つの観点にしぼって問題を考えた(森岡1980)。一つは、対人関係の中で形成されていく要因である。自己像形成を役割取得過程とみた場合、個人の対他関係の中での役割は、その自己像の内容を大きく規定しているわけである。とくに、そこでは、両親の態度や行動によって影響をうける側面が大である。

第二の観点として、幼児期同様、青年期においても、身体像の形成との関連性が問題となって

くる。すでに、青年期よりずっと以前に、自己像の一面として、他者からみられた「視覚的身体像」が内在化されるが、青年期では、急激な身体的発育と第二次性徴による身体的変化が、視覚的身体像の全面的改変を余儀なくさせるという意味で、あらためて、他者との関係の中で、身体像の再構成が迫られるわけである(福井1979)。

さらに、以前の身体的行動の領域に存在しなかったあらたな要素として、性的な衝動が自己の身体像に質的な転換を要求することになる。

以上の二つの側面について、青年期において、直線的にまとまって形成されていくということは決してない。对人的に敏感なあまり、自己内閉におちいたり、内的衝動を過度に抑圧して、自己の身体的な変化を受容できなかったりする状態はごくふつうに生じる。この点で、青年期に関して、その自己像、自己認知の形成過程をとらえるには、「正常な危機」の中で、自己像形成に破綻を生じた状態を記述していく、病理的な方法が一つの有効な手段となる。

## 2. 自己像の形成過程に関する操作的研究

自己像に関する病理的研究はまだみるべきものはなく、「自己像」をテーマとする研究は青年期を中心として、以下にのべる操作的な方法を用いてなされてきており、しかもかなりの量に達してきている。しかしながら、それらは自己像の現象面をとりだして、他の変数と比較するといった研究が大半をしめ、ここで問題としたい、自己像がいかに発達的に形成され、その内容諸次元が、いかに分化、統合していくか、という発達的な研究は意外に少ない。

自己像の研究方法として、これまでに主に三種類の方法が用いられてきている。

### 1) プロフィール法(チェックリスト法)

あらかじめ用意された叙述や形容詞のリストについて、自分にあてはまる項目を選ばせたり、何段階かに評定させる方法。

### 2) Q分類技法

人格を記述するのにふさわしい多数の項目について、統計的に正規分布するように、「自分に最もあてはまるもの」から、「そうでないもの」まで、9段階に強制分類させる方法。

### 3) 投影的方法

これには二種類あって、TATなどの投影検査で、物語の中の主人公についてチェックリスト法などを用いて、間接的にその人の自己像をとらえようとする方法と、文章完成法の一つで、TST (Twenty Statement Test) や、WAY (Who Are You technique) のように、被験者に最小限の手がかりを与えるか、その反応の方向づけを行ない、自分についての叙述を求める方法がある。

中でも、SD法によって測定された自己像について、理想自己と現実自己の概念間の評定差異得点(Discrepancy Score: D得点)を算出し、個人内での様々な心理的変数との相関をとる研究方法がよく用いられている。とくに、このD得点を適応、不適応の指標、すなわち、D得点が大であることが、その個人の心理的不適応の度合いが大きいことを示すと考えられ、あるいは、自己評価(Self-esteem)の操作的な定義として、D得点は意味づけられている。このD得点を用いた研究は相当量にのぼるが、その意味内容を検討していく努力はあまりはらわれていない。その中において、このD得点を、適応の指標というより、発達、成熟の指標とみる立場がある。KatzとZigler(1967)は、チェックリスト法を用いて、理想自己と現実自己のD得点を10歳から16歳に

かけて調べたところ、IQ 上位群で、上級学年になればなるほど、D 得点が増大の傾向を示している。Katz らはこの結果から、D 得点は不適応の指標というよりも、発達の指標としてみる方がよいというみかたをしている。すなわち、成熟度の高い青年は、社会的要求への寄与の度も高く、既存の自己像に安定せず、自己に対する要求水準も高くなるので、当然、現実自己と理想自己の差異得点が高くなるわけである。

自己像や自己認知に関して発達のにとらえた操作的研究について、加藤(1978)は、自己像の具体的な意識内容や発達傾向を実証的に示すことはきわめて困難であることを指摘している。また、発達の自己像を追った研究は少なく、その中についても、自己像の測定法が研究ごとに異なり、研究相互間の関連性、系統性に欠けるのが実情である。

したがって、これからはむしろ、SD 法や TST によってとらえられた、自己像の具体的内容そのもの、下次元を吟味し、各内容カテゴリーの相互連関や、形成過程をくわしく追っていく努力が求められる。たとえば、Gordon (1969) は WAY を用いて、自己像の内容カテゴリーを 8 領域30項目に分類して分析しており、また、Montemeyor 他(1977)は、TST の内容を30のカテゴリーに分類し、「自分は何であるか」について、自分の属性を記述するのに用いる内容(たとえば、性、職業、宗教など)が、年齢にともなっていくかに変化するか、を調べている。吉川(1960)によれば、青年期において、自分を描写する作文の内容を分析した結果、大きく4つのカテゴリーにわけられる。

- 1) 身体的特徴(身長、容姿、体質、動作など)
- 2) 内的特徴(気質、能力、趣味、過去の思い出、将来への希望、計画など)
- 3) 対人関係(他人との関係における自分の地位、自分の他人に対する感情や態度、他人の自分に対する態度など)
- 4) 生活態度(個人生活の価値や目的の探求、道徳、信仰など)

これらの自己像の諸内容について、その形成過程をみていくと、ある時期では、他の時期に比べ、一つの特徴が自己像を構成するのにより重要な要因になっているという事実がうかがえてくる。たとえば、思春期にはいるころは、自分の容姿に関心が集中するし、青年期の後期では、個人の社会観や価値観を自己の属性の中心にもってくるという様相を示す。このように、文章完成法や作文の具体的記述内容を細かく調べていく努力によって、自己像が構造的にいくかに分化、統合していくかを把握できるはずである。

## II. 自己認知の発達と自己中心性との関連

### 1. 自己像形成に関する認知発達の側面

青年期における認知的にみた「自己中心性」の特徴、その発達のな変遷を追っていくことは、青年期における自己像の形成過程を調べるのに重要な視点を提供する。というのは、前章に述べられたように、従来の自己像に関する操作的研究がなおざりにしてきたのは、自己像の認知発達の側面であるからである。いうまでもなく、自己像は個人の認知過程から生じるわけで、自己認知と他者あるいは外界認知との相互関係、両者の間の分化、統合の過程をへて個人の自己に対する認知像が形成されるのである。

しかしながら、自己像に関してその認知発達の側面をとらえていく研究はごく少ない。これは、

一つには、自己像という変数があまりにも複雑な事象であり、幼児期まではともかく、それ以後、とくに青年期の場合、その認知的側面を細分化してとらえていく作業は非常に困難であるからであろう。この問題については、とくに、対人認知 (Person Perception) の発達について、自己認知の分化、統合の過程が、対他認知の構造的な複雑さ、分化の程度と並行しているのではないか、という仮説のもとに、実証的な研究が蓄積されつつある (Livesley & Bromley 1973)。

さきにとりあげた、Montemeyor らの研究でも、年齢にともない、自己像の記述のしかたが分化していくことがうかがえるし、その認知的側面は、年齢に従って、具体から抽象へよりヴァリエティに富むことが予測される。また、この認知的な分化の程度について、Witkin 他(1962)は、主として描画法を用いて、身体像の明細化や、防衛メカニズムの特殊化の程度を指標として、「心理学的分化」(Psychological Differentiation) という概念を導入している。後に詳述することになるが、この Witkin の方法を自己認知の形成過程に適用していく努力が今後必要となってくるであろう。

## 2. 自己中心性の概念

### 1) 児童期までの自己中心性の特徴

自己像の認知的側面の分化統合過程を検討する前に、自己中心性の概念を整理しておかねばならない。

ピアジェによれば、幼児期から児童期における自己中心性の特徴の変遷は、感覚運動期 (Sensorimotor Stage)、前操作期 (Preoperational stage)、具体的操作期 (Concrete operational stage)、という認知発達の各段階に並行している。この三つの時期の自己中心性の特徴を要点だけまとめると、

#### <感覚運動期：0—2歳>

この時期の子どもは、まさに自己中心性に支配されているといつてよい。自分自身と自分の行為及び、所与の状況の特徴との間の分化が完全に欠如した状態である。この段階から進むためには、自分と自分でないものとの現実的な分離を通して、「対象」の概念の形成と、自己の分化が必要である。これが、最初の「脱中心化」(decentering) の過程である。

#### <前操作期：2—7歳>

この時期には、対象に対する自己中心性を脱却できる能力を示してくる。しかし、とくに、言語を獲得するにつれてきわだってくることであるが、様々な象徴との関係の中で、前の時期とは質的に異なった自己中心性が芽ばえてくる。子どもは、言葉が実際以上の情報を伝えると思ひこみやすい。そこに、子ども自身のみかたと他人のみかたとの間を分化することができないことが生じる。このような、表象についての自己中心性を克服するためには、具体的操作にもとづく思考の出現が必要である。これによって、二つの要因や関係を同時に扱うということが可能になり、象徴とそれが示す実際の間を区別することもできるようになる。

#### <具体的操作期：学童期>

知的発達が進んで、学童期を経過すると、ものを分類したり、その関係づけや、質的な区別をみることができるようになる。しかし、この時期の子どもは、具体的操作によって新しく獲得された、精神的な所産と、知覚的な所与との間を明確には区別できない。子どもにとって、ある仮説を立てるとき、それが自分の考えからでたもの、というよりむしろ、外在化したデータにもと

から存在するものと考えるのがふつうである。このような、具体的操作における自己中心性は、青年期にはいつ、形式的操作にもとづく思考を獲得することによって解決していく。そこでは、自分の精神的な産物の独断性を見ぬき、知覚的な現象とそれらを分離することを学ぶわけである。

以上のように、三つの認知発達段階に並行して、児童期までの自己中心性の特徴がうかびあがってくる。そこでは、常に、中心化と脱中心化の相互作用が存在している。この過程の進展をうながす要因として、子どもの「自己化」の能力、すなわち、外的なモデルが自己の内的なモデルとして働くように、自己の中に外的モデルを内在化していく、という能力をあげねばならない(園原1979)。この能力は、子どもの内発的な活動性を基礎としている。最初は自己流の動作活動であったものを、外界の圧力に対して、うまく受けとめることができるように、自己活動を転化していくという努力によって、環境との調節がはかられるわけである。

## 2) 青年期における自己中心性

青年期は、認知発達理論の枠組の中では、形式的操作による思考能力を獲得する時期として位置づけられる。この段階での思考の特徴は、自分の考えていることについて考えることができる、という能力が獲得されることであり、それに伴って、現実だけでなく、可能性をも扱える抽象的な思考が可能となる。自分自身の考えを概念化する能力に並行して、他人の考えについても概念化できるようになる。また、思考の次元だけでなく、認知的あるいは感情的な次元でも、自分と他者の立場の区別ができることが、青年期の大きな発達の課題となる。

しかしながら、思考や認知、感情の次元で、自他の区別を可能にするには様々な困難を伴う。むしろ、青年期においては、思考の形式的操作の獲得をよそに、急激な身体的変化に伴って、自己への関心が高まり、自分の経験や立場を絶対化しがちである。すなわち、他人の考えや立場に、かなりの程度影響をうけていながら、それに気づかず、自分の経験が自分独自のものであると信じてしまっていることが多い。

Elkind (1967, 1978) は、青年期の自己中心性について、主に二つの特徴をあげている。一つは、「想像的な聴衆」(Imaginary Audience) と名づけられる特徴である。青年は自分に対する他人の反応を期待している。心身の急激な変化に対応して、自分が人からどうみえるかについての関心が高まり、青年は自分が、自分の想像している聴衆の関心をいつもひきつけているように考えてしまうわけである。

また、この時期には、すべての人間に共通の経験と、自分に個有のものとを区別することができず、自分に個有の経験を他のすべての人にも共通である、と考えてしまうことがよくある。この特徴を Elkind は「個人的な寓話」(Personal Fable) とよんだ。

このような、青年期における自己中心性は、社会的相互作用による経験が蓄積する中で、年令とともに徐々に自己中心的行動が減少していく。認知的には、自分自身の関心事と他者のそれとを区別でき、感情的には、自分の感情と他者の感情を区別していくことによって、他者との共感的関係を形成することができるようになる。

「想像的な聴衆」という行動は、各々が自分自身の関心事をもっていること、そのちがいを認識することによって、年令に従って減少する。「想像的な聴衆」という行動については、Elkind と Bower (1979) によって、質問紙を用いた測定法により、年令による推移が調べられている。また、「個人的な寓話」という特性についても、仲間との親密性を発達させることによって、感

情や考えの共有がなされ、自分の経験の相対化を通して、過度の自己破壊や自己拡大にむかう行為は、年齢に従って減少してくるといえる。

また、青年期を大きく三つの時期にわけて自己中心性の特徴の変遷を自己像との関連からとらえてみると、

<前期青年期>

上述のような、「自分はまわりの関心をひきつけている」と想像してしまったり、あるいは、自分の経験を絶対化してしまうという自己中心性の特徴は、この時期に最も明瞭にあらわれる。急激な身体的変化にともない、自分に対する関心の度合が最も高まり、「自己意識」の発現とともに、周囲の環境に対する内向化の傾向が強まる時期である。

<青年期中期>

この時期には、年齢に従って徐々に、自分の考えや感情と、他者のそれとをよく認識し、区別できるようになってくる。それとともに、自分の主観に対する信頼が強まり、集団や社会に対して積極的に働きかける活動が重要になってくる。しかしながら、自分の内的営為に焦点化しやすい傾向はまだ強い。

<青年期後期>

この時期になると、自己中心性の二つの特徴は減少していく。しかし、自己像の様々な構成要因がより分化してくるために、質問紙でとらえられたレベルでは、むしろ自己への関心の度合が高まる (Enright 他 1980)。つまり、集団や社会に対する自分の役割についての自覚が強まり、公的な自己 (Public Self) と私的な自己 (Private Self) との区別が明確になるわけである。こうして、自己中心性と社会中心性の個人内でのバランスが安定してくる。

以上のようなプロセスは、自己に対する関心と、他者に対する関心が明確に分化していくことによって、「自己中心性」から脱却していく過程と読みとることができる。

### 3. 自己認知及び他者認知の発達分化過程

さて、以上のような自己に対する認知と、他者に対する認知が分化していく過程について、心理学的分化の概念と、対人的能力の発達という二つの観点からくわしくみていきたい。

#### 1) 認知機能の発達分化

自己像の形式過程は「自分とは何か」という、広義の認知過程である。青年期の認知発達について、自己中心性の変遷という観点からみていくと、自己認知は他者認知の発達と並行してより分化し、統合されていくということがいえる。自己像の内容諸次元が個々において、どのように構成され、相互の作用をつくりあげていくか、ということも、まさに自己認知と他者認知の相互連関の中でみていかねばならない。

認知機能の発達分化について、Witkin 他 (1962) は、「心理学的分化」という概念を導入し、個人の経験を構造化していく能力を多面的に調べている。まず、子どもとの半構造化面接を通して、「子どもが外界と自分自身に対する認知のしかたをいかに分節化しているか」という、明細化 (articulation) の程度について、6つの規準を設けている。

- i) 手段一目的という関係への気づき
- ii) 時間と空間についての明細化
- iii) 自己と他者の動機 (motive) についての気づき

- iv) 情報収集への自発的な興味と活動
- v) 応答表現が明確で関連性が高い
- vi) 抽象化、一般化する能力がある

以上が基本的な認知発達、分化の指標であると考えられる。これについて、自己認知、他者認知を相互関連的にとらえていくのに必要な条件に焦点をしばると、認知的な明確さ (cognitive clarity) の基盤に、外界の状況と自己という二つの経験を「身体」という位置からの知覚にもとづいて分化していく、という過程がうかびあがってくる。

「自己」という一貫した認知像の形成過程をみるために、Witkin の理論をもとに、以下の三つの観点をとりあげたい。

#### <身体概念の明細化>

身体像、身体概念は「自己」のまさに基盤となる要因であることは、先に述べたとおりであるが、Witkin は身体概念の明細化 (articulation of body concept) の程度、及び個人の身体像境界 (body image boundary) の形成のしかたを、人物描画法によって測定する。その描画の特性については、大きく三つのカテゴリー(形態水準、同一性及び性差、精密化のレベル)をもとに細分化したリストをつくり、5段階評定で、個人が身体概念をソフィスティケートする程度を調べている。

このような身体概念は、個人の対人知覚における「場に対する依存性」(field dependency) との連関が大であり、また、個人の知覚世界のゆがみ、すなわち、自己中心的な知覚によってしか、自己と外界の把握を行なえず、客観化できないという特性について、精神病理との連関性が重大である。したがってこの概念は、自己愛的な自己没入 (Self absorption) の程度の一つの指標として有効である (Witkin 1965)。

#### <独立したアイデンティティの感覚>

独立したアイデンティティの感覚 (sense of separate identity) とは、個人が、自分のもつ要求、感性や諸属性を、他人のそれらとを明確に区別して、自分のものであると自覚できることである。Witkin は、個人の表現する行動について、三つのカテゴリーによって特徴をとらえ、それにもとづいて、この感覚の形成過程をみている。

- i) 他人が自分を支持してくれることを求めたり、他人に相談する必要を強いて、求めなくなる。
- ii) 他人の矛盾した態度や判断、価値観に直面しても、自分独自の志向性を維持できる。
- iii) 種々の社会的文脈 (social context) の中で、自分に対する安定した見方をとれる。

以上の三つの行動特性は、そのまま、青年期以後の、自己中心性から脱していくという課題の到達目標として、とりあげることができる。この感覚を測定するについて、TAT を用いて、その課題遂行の態度を観察し、評定する方法が用いられている。

#### <コントロールと防衛の構造化>

以上の二つの観点にあわせて、とくに、集団の圧力などの外的な規準による影響から、自分の態度や判断を維持していく方法を、いかにして個人が身につけていくかを調べるのが重要である。その方法が、すなわち個人のコントロールや防衛の様式であるといえ、「自己」の分化発達のための重要な要因である。

ここでいうコントロールとは、個人の衝動を処理する適応的なテクニックであり、防衛 (defence) とは、不安経験に対する自己防衛的な作業である。ともに、場の種々相に対応する方法を徐々に構造化していくことによって形成される。このような、防衛様式の構造化と経験の分節化との間の相互関係を綿密に追っていくことが、「自己」の分化発達をみていくために重要となる。

ある経験に対して、個人がどのようなコントロールあるいは防衛の様式を選択するか、ということ把握するために、たとえば、TAT における攻撃性の処理方法をみるという手段が用いられる。また、防衛様式の構造化の程度が、組織化している (organized) か、未熟、未分化なままであるかという段階評定も試みられている。

もちろん、この第三の観点になると、研究対象としての、狭義の「自己像、自己認知」の領域を逸脱しており、どうしても主体としての「自我」という概念を導入しなければならない。認知発達という枠組の中で「自己」の形成過程をとらえるという課題においては、自己と自我の差異を明確にし、その両者の構造的、あるいは機能的な関係を把握する作業が不可欠である (斎藤 1969)。

## 2) 対人的能力の発達と自己認知

自己認知と対他認知の相互連関の様式は、個人特有の形で、経験的に形成されていくものである。この「自己—他者」の関係様式について、いくつかの特徴をあげることにより、自己認知の分化の過程をたどることを試みたい。

まず、この関係様式は、様々な状況を経るにしたがって、堅固で変化しがたいものになってくるが、また、個人の自己像、自己認知の形成に重要な作用を与える。そのように形成された、自己—他者の関係様式は、いかえれば、個人が身につけた外界に対する防衛様式といえる。したがって、類似の構造をもった状況の中では、過去に形成された最もなじみのパターンが引き出されやすい。それが個人の自分の姿を他人に表明する枠組となるわけである。

よりくわしく、そのパターンをみてみると、自己—他者の関係様式がより成功的に形成されるには、二つの条件が選択的に扱われている (Cotrell 1969)。

- i) そのパターンが有効な状況や条件を選択できること。
- ii) その状況に対して固定的に反応を構造化するのではなく、表現の柔軟さが状況の中で許容されること。

新しい状況に際して、相互関係の様式が投影されると、それに応じて他者の反応をひきおこし、さらに、そのパターンを支持する新しい状況をつくっていく、というように相乗的に、柔軟な対人関係の様式が形成されている。このような対人関係の様式を柔軟につくっていく能力を、対人的コンピタンス (interpersonal competence) とよぶことができる (Weinstein 1969)。

精神分析の対象関係理論でも強調されるように、このような自己—他者の関係様式は、個人の発達の歴史のごく早期に確立されたものが、より出現しやすい。このような自己—他者間のシステムが変化するには、枠組となる他者の反応の変化を、自分の中で「再定義する」ことが必要である。個人が認知している「自己」は、その枠組となる他者の役割を、自己自身の反応の中に演じることを通して経験される、といえる (象徴的相互作用)。いかなる状況においても、人は他人の反応の認知をもとに、他者に応じて「自己」を一般化していくことが、自己像形成の初期に必ず行なわれる。したがって、その時点で「内在化」された他者と、外的現実の他者との間の複

雑な関係が、自己認知の変化をひきおこすカギともなるわけである。

心理治療のプロセスの中でよく生じることだが、患者の自己に対するみかた、あるいは外界に対する認知のしかたが、治療者との関係をとおして、まったく変わってしまう、という現象がある。また実際に、心理治療または種々のグループワークの中で、認知転換を促進する技法が開発されつつある(日高1979)。以上についても、自己認知の分化発達は、他者認知をより明確化し、構造的により細分化していくということを通してなされる、という事実の裏づけとなる。

また、遊戯療法などにおいて、治療経過がすすむにつれて、治療者や、遊具、他児、部屋その他に対する子どもの認知が、徐々に分化していくことは、よく確認される事実である。治療空間という、非常に限定された場の中で、個人の外界認知が分化し、自己と対象間の疎通性を再形成することが可能になるわけである。

### III. 自我同一性と自己中心性の関連

青年期において、自己中心性という概念を導入する場合、青年期の大きな発達の課題である、自我同一性の形成との関連について述べておかなばならない。

Erikson (1959) の定義によれば、自我同一性の達成とは、「自分自身が時間的な連続性、一貫性をもって自分である、という主体的な感覚と、それによって他者との結びつきが保証され、他者が、自分の連続性を認めているという感覚が同時に生じている状態である。」これはいいかえれば、「主観的な自己の感覚と、他者、社会との連帯感が自己の中に統合的に生じている状態」である。

この定義に関して、具体的に概念を規定していくには、どの側面からこの概念をとりあげるかによって大きくかわってくる。エリクソンの定義を「自己像」の側面からみた場合、自己像形成についての二つの主要因、「対社会的な側面」と「自己の身体的な側面」が同時に、自己の中に内在化しているのが、自我同一性の達成された状態であるといえる。

また、自我同一性という概念をとらえるとき、その課題のまっとうな解決の方向をさぐるより、同一性形成に困難を生じた具体例について、その病理的な側面から検討した方がわかりやすい。とくに、青年期特有の危機的現象について、以上の二側面から分類し、それらを自己認知の安定性や一貫性がくずれた状態として、把握しなおすことができる(森岡1980)。

以上のような、自我同一性に関するリサーチは、また認知発達理論と自我発達理論の橋わたしをなすものとして重要である(Adams 1976)。とくに、自我同一性の概念を、認知発達の裏づけによって再定義することによって、自我同一性という概念が、かなり広範囲かつ、あいまいに用いられている現状を打開するのに、大きな寄与をなすと考えられる。この概念は、認知的な発達と、それにとまなう構造的な分化のプロセスとして概念化することができる。

上述したように、幼児期から青年期に至る、自己中心性の発達段階的な特徴は、前段階の自己中心性の形態を除去しながら、新しい自己中心性の特徴を導く、という図式をとる。一方、自我同一性の形成は、広い意味で、社会的経験と、「未分化な状態から複雑で分化した概念化のレベルへと移る」心理的な発達との統合にもとづくといえる。以上のことから、「自己中心性」に関する発達のな変遷は、自我の成熟や、心理—社会的な段階の発達と並行していることがわかる。また、青年期における自己中心性の特徴は、自我同一性の形成に関連する、新しい心理的構造の

内在化を準備するといえる。

Adams は、同一性形成の認知発達の背景として、「脱中心性」(decentering)の法則をとりあげている。すでに、自己中心性について、大きく4つの段階に関する特徴がみられたわけであるが、その各々の段階ごとに、世界に対するより成熟した認知のしかたが獲得される。この過程は、同化—調節という図式の中で描かれる、万能的な自己感から社会化された自己への移行であり、したがって、自己中心性を解決し、自己像の一貫性、統合性を獲得するには、各々の発達段階での危機の解決が必要となるわけである。

### 結 び に

青年期における自己像の形成という問題について、主に「自己中心性」の概念を導入し、その認知発達の側面をとらえなおすことを試みた。この試みから、自己像研究の新しい視野が開けてくると考えられるからである。とくに、Witkin の認知機能の分化に関する指標を中心にとりあげたが、この立場からすると、自己像の不均衡と発達水準との関係が、認知の分化度によって測定できるはずであり、自己像の構造的な統合性や時間的な一貫性を獲得していく、という青年期の自我同一性の形成過程を規定するカギとなると思われる。

これに関連することであるが、そもそも「自己像」の研究は、とくに、個人の行動の予測のために有用であると思われる。すなわち、個人の外界に対する認知様式と、内的衝動に対する処理のしかたを橋わたしするものとして、個人の自己像があるわけで、また、その同一性の感覚の基礎として、「個人が自分自身を特徴づける概念」すなわち、「自己像」を規定していかなばならない。このように、個人の認知様式及び、対人認知、自己認知の分化と統合の過程を、各々の心理的な諸機能に照合していく作業が、今後なされていかなばならない。

### 引 用 文 献

- Adams, G. R. 1976 Personal identity formation : a synthesis of cognitive and ego psychology, *Adolescence*, 12
- Cottrell, L. S. 1969 Interpersonal interaction and the development of the self, in Goslin, D. A. (ed) : *Handbook of socialization theory and research*, N. Y., Rand McMally, 543-570
- Elkind, D. 1967 Egocentrism in adolescence, *Child Development*, 38, 1025-1034
- Elkind, D. 1978 Understanding the young adolescent, *Adolescence*, 13, 127-134
- Elkind, D. & Bowen, R. 1979 Imaginary audience behavior in children and adolescents, *Development. Psychol.*, 15, 38-44
- Enright, R. D. et. al. 1980 Adolescent egocentrism-sociocentrism and self-consciousness, *J. Youth. Adoles.*, 9, 101-116
- Erikson, E. H. 1959 Identity and the life cycle, *Psychol. Issues*, vol. 1. (小此木啓吾訳 自我同一性 誠信書房 1973)
- Exner, J. E. 1973 The self focus sentence completion : a study of egocentricity, *J. Pers. Assess.*, 37, 437-455
- 福井康之 1979 青年前期の「主体としての自我の意識」と Body Cathexis (身体への関心集中度), 愛媛大学教育学部紀要1部, 25
- Gordon, C. 1969 Self-conceptions : configurations of content, in Gordon, C. & Gergen, K. J. (ed.) : *The self in social interaction*

森岡：青年期における自己認知の発達—自己中心性との関連性

- 日高正宏 1979 各種心理療法における「気づき」(Awareness)と認知転換, 京都市カウンセリングセンター研究紀要, 9, 55-78
- 加藤隆勝 1978 自己意識の発達に関する研究の現状と課題, 東京教育大学教育学部紀要, 24
- Katz, P. & Zigler, E. 1967 Self-image disparity: a developmental approach, *J. Pers. Soc. Psychol.*, 5, 186-195
- Livesley, W. J. & Bromley, D. B. 1973 *Person perception in childhood and adolescence*, London, John Wiley & Sons
- Montemeyer, R. & Eisen, M. 1977 The development of self-conceptions from childhood to adolescence, *Development. Psychol.*, 13, 314-319
- 森岡正芳 1979 青年期の自我発達理論に関する統合的展望, 京都大学学生懇話室紀要, 9, (別冊), 19-42
- 森岡正芳 1980 青年の自己像に関する研究, 関西心理学会懇話会シンポジウム「自己像」
- Mullener, N. & Laird, J. D. 1971 Some developmental changes in the organization of self-evaluations, *Development. Psychol.*, 5, 233-236
- 斉藤久美子 1969 「自我機能」と「現象的自己」との関係における統合作用について, 四天王寺女子大学紀要, 1
- 園原太郎 1979 子どもの心と発達, 岩波書店
- Weinstein, E. A. 1969 The development of interpersonal competence, in Goslin, D. A. (ed.): *Hand book of socialization theory and research*, N. Y., Rand McNally, 753-775
- Witkin, H. A. 1965 Psychological differentiation and forms of pathology, *J. Abnorm. Psychol.*, 70, 317-336
- Witkin, H. A. et. al. 1962 *Psychological differentiation*, N. Y., Wiley
- 吉川房枝 1960 青年期における自我の形成, 教育心理学研究, 8, 26-37